



# 余白と仮設の舞台



川崎 将 (かわさき まさし)  
日本大学 理工学部 海洋建築工学科



衰退する産業といわれる水産業。東日本大震災以後、被災以前と変わらぬ場所に変わらぬカタチで復興の進む水産業施設のあり方に疑問を投げかける。三陸都市の基盤を支える水産業施設は被災以前から衰退の一途を辿っている。水産業においても6次産業化が進む今、産業と町と人の新たな関係性が求められているのではなだろうか。

本計画では合理化と大型化が進み人々の日常風景から乖離してしまった水産業施設を新たな町のハブ空間として最構築し産業の根本からの復興、すなわち「新興」を目指す。

敷地は宮城県石巻市中瀬。かつて川湊として繁栄を見せたこの場所も水産業施設や船舶の大型化によってその賑わいを失った。この場所に新たな制度として注目を集める「水産業復興特区」を利用する企業を集積させ、ヒト・モノ・コトの集まるハブ空間として都市インフラを引き込んだ複合型水産業施設を計画する。



## 講評

江戸時代より水産業と海運で栄えた石巻市も、東日本大震災の地震や津波で多くの犠牲者と被害を被った。この作品は、衰退する水産業を再興すべく、旧北上川の河口より1.5kmほど上流の中州に水産業復興特区を設け、市民の日常生活の中に漁業を身近に感じるような建築を提案した作品である。現在1橋だけの中州と市内を繋ぐ橋を下流にも新設することで、中州全体の利便性を高め、水産業施設の集約と分散を図りながら、水産業と市民とが出会うことのできる余白=空間を設け、水揚げ場や市場、加工品の干場、パブリックキッチンや店舗・・・等のように漁業の旬に応じた仮設的な空間として活用することで、中州の風景を石巻市民生活に還元し、嘗ての川湊時代のような賑わいを取り戻そうとしている。提案された図面や模型は判り易かったが、復興特区としての特徴や余白の作り出し方や使われ方には、更に検討の余地があると思われる。石巻市の中州を計画地に選定するのであれば、”市民が安心と思える安全な施設とは何か”を掘り下げた提案が必要であろう。杭支持された鉄筋コンクリート構造として計画しただけでは、安全で安心な施設とは思えないのが石巻市民の感情であると推察される。

(審査委員：古川 洋)